

紫禁城の美学 清代の宮廷工房「造辦処」

清代（1644～1911年）の宮廷工房（造辦処）は、歴代の皇帝が愛用した、あるいは宮殿を美しく設えた数多くの調度品の製作、修繕および管理という重要な役割を担っていました。康熙年間（1662～1722年）に紫禁城内に創設され、雍正年間（1723～1735年）および乾隆年間（1736～1795年）にかけて最盛期を迎えましたが、20世紀初頭にその役割を終えました。数十に及ぶ専門作房（工房）では、中国全土から集まった熟練職人たちが、最高の素材を用いて、日用品から息をのむような傑作まで、あらゆるものを製作していました。職人により生み出された多種多様な作品は、清代宮廷の究極の美学と職人技を余すところなく伝え、現在の故宮博物院の膨大なるコレクションの重要部分を成しています。

故宮博物院より150点を超える素晴らしい作品を迎える本展は、造辦処の歴史、組織構造、素材の選定、製作工程、そして芸術的な創意と成果を探求する初の大規模な試みとなります。香港のデザイナーを始めとする優秀なクリエイターが展示デザインを手がけ、新たな視点から宮廷の美学を紹介する本展は、清代から現代に至る暮らしと意匠をめぐる対話の扉を開くものとなるでしょう。

本展は香港故宮博物院と故宮博物院の共催です。本展の会場構成・美術監督はCOLLECTIVE Studioが務めました。
なお、インフォグラフィックのデザインの一部を設計及文化研究工作室が手掛けています。

造辦処とは

造辦処は、清代の皇帝および宮廷のための調度品を専門に製作していました。内務府の管轄下に置かれ、康熙時代（1662~1722年）に紫禁城内に設立され、後に円明園に出先の工房が設置されました。これらの工房や地域の特産工芸品を中心に、最終的には国全体の生産網が確立されました。

造辦処には、調度品製作の管理、保管、文書化を担当する特別な部門のほか、様々な素材や技術を専門とする多様な工房、部署、工場がありました。八旗軍の行政部門によって管理されたこれらの工房には、中国全土から一流の職人やヨーロッパの専門家が集められました。造辦処は、清朝の技術革新を示すものであると同時に、中国とヨーロッパの間の活発な文化交流の象徴でもありました。

製作と革新

造辦処は、調度品ごとに最適な素材を厳選しました。清朝の広大な領土と、近隣地域との活発な交流により、職人たちはあらゆる種類の素材を手に入れることができたのです。さらに彼らは、過去の王朝の工芸品を再解釈し、新たな意匠や機能を加えて製作することもありました。実際の製作に先立ち、職人は皇帝の審査を受けるため、さまざまな試作品を提出しました。何度も修正を重ね、正式な許可が得られて初めて、本製作が開始されたのです。

雍正時代（1723～1735年）と乾隆時代（1736～1795年）において、造辦処は中国の伝統技法を基盤とし、それを発展させながら、海外の最先端技術も積極的に取り入れました。時計製造、玉彫、琺瑯（エナメル）、漆器、銅器、ガラス製造、象牙彫刻の第一人者である職人たちを各地から召集し、その制作にあたらせたのです。職人たちは高度に分業化された環境のなかで、互いに緊密に協力しながら作業を進めました。このように造辦処で革新と改良が繰り返された結果、清代の職人技はまさに最高潮に達しました。

創造的な意匠と展示

「作品の目的は何か、それはどのような状況で使用されるのか」——こうした問いかけは、20世紀初頭以来、現代のデザイン界を定義づけてきました。しかし、すでに清朝の宮廷においても、こうした思想が深く探求されていたことがうかがえます。造辦処の製作過程から、ブランディング、古物主義、錯視など、現代デザインにも通じる概念を見て取ることができるのです。清朝宮廷は、貴重な骨董品から日用品にいたるまで、作品を保管・保護し、美しく展示するための特注の収納箱や表装（マウント）といった独自のシステムを発達させました。これにより、異なる素材や異なる時代の作品同士が融合し、清代特有の洗練された視覚言語が形成されました。